

接触場面における日本語母語話者の発話修正
－問い合わせ電話会話にみられるフォーリナー・レジスターの特徴－

金澤眞智子
(岡山大学留学生センター)
非常勤講師

1. はじめに

円滑なコミュニケーションを成立させるために、非母語話者（以下NNS）が様々な方略を用いる一方で、言語能力的に優位に立つ母語話者（以下NS）は自己の発話になんらかの修正を加えることが知られており、Ferguson(1971)は社会言語学的観点からフォーリナー・トーク（以下FT）と定義した。

レジスターという用語は「言語変種の使い方に焦点を置く」場合に使われる。Arthur et al.(1980)はNNSの音声的要因すなわち話し手のことばの外国人的アクセント(Foreign accent)によって引き起こされた言語変種をフォーリナー・レジスター（以下FR）と定義し、非文法的構造ではなく理解しやすい文法や語彙が使用されるとした。

第二言語習得研究の枠組みにおいても、FTは非文法的構造は持ちにくく、円滑なコミュニケーションを成立させるために話し手と聞き手の間で交わされる「理解可能なインプット」という観点で捉え直された。

Long(1983)はFTをコミュニケーション成立のために行われる意味の交渉(negotiation of meaning)という現象から分析した。これは学習者の第二言語能力の不足のためにおこるコミュニケーション上の困難を克服する手段であり、会話の両方の当事者によって行われる共同作業なのである。コミュニケーション上の支障を乗り越える過程においては、語彙や文法などの簡易化である言語的修正だけではなく、NS間の会話においても使用される相互交流的修正が多用されることが指摘されている⁽¹⁾。

日本語教育においても上述した一部FRの概念を含め、いわゆるのFTの先行研究が、スクータリデス(1981, 1988)、ロング(1992)、Onaha(1987)、志村(1989)、大河原(1989, 1990)らによってなされている。しかし、FTの特徴の記述において、格助詞の省略の有無などに異なる結果を表している。このことから、「どのような相手に、どんなFRが使われるのか」というレ

ジスターとしての位置づけに

- (1) 会話の参加者の属性：社会階層、性差、年齢、親疎関係も含む。
- (2) 場面：会話の目的や文脈を規定する場面。
- (3) 資料収集の場面的条件：人為的に設定した場面と現実場面のどちらから、資料を収集するかということ。

などの統制が重要であることがわかる。

さらに最も基本的な問題としてNNSの言語運用能力の差異とFRの相関を捉えた先行研究はなされていない。高い日本語運用能力を持つNNSに対するFRは存在するのかどうかという報告や、NNSの話す日本語に対してNSが下す評価の反映というような言語態度の観点からFRを捉える研究はまだ少ない。このためFRの分析には、実証的データを数多く集めるという基礎的作業から始めなければならないと言えよう。

FRの特徴を記述する研究は、

- (1) コミュニケーションの構造を理解する一助となる。
- (2) 対照会話分析の領域にも応用可能である。
- (3) 日本語運用能力をNNS側のパフォーマンスだけから分析するのではなく、コミュニケーションの相手であるNSの発話を考慮するという点で、話すことの教育的評価に新しい視座を提供する可能性がある。

などの点から有益である。

本研究の目的は、上記のような考えに立ち、NNSの日本語運用能力がFRの発現の仕方に影響すると仮定し、最も現実場面に近い形で検証することにある。そして、影響があるならば、どこに、どのようにそれが現れるのかを会話分析と統計的手法で分析し記述する。

2. 実験

日本語使用場面では実際に対面した場合、外面からの判断といったNSの「外国人」に対するバイアスからFRが使用される可能性が高くなり、FRを言語運用能力の反映とみるには変数が多くなると考えられた。このため、FRの分析資料として、電話による情報収集場面を設定し、日本語運用能力レベルが異なるNNSに対応した複数のNSの発話を収集した。

2.1 被験者

被験者：JR岡山駅および倉敷駅案内係駅員の男女

実験協力者：ACTFL OPI⁽²⁾により日本語能力レベルを分けた

NNS 12名およびNS 4名。

()内は元もしくは母国での職業を表す。

中級NNS	上級NNS	超級NNS	NS
30代ガーナ人男性博士課程在籍	30代中国人男性博士課程在籍	70代アメリカ人男性(大学教授)	40代男性大学教授
30代ドイツ人男性博士課程在籍	30代アメリカ人男性英会話教師	30代中国人男性(大学教官)	70代男性(警察官)
20代イギリス人女性高校英語教師	40代中国人女性修士課程在籍	20代中国人女性(修士課程終了)	40代女性高校教師
30代マレーシア人女性(会計士)	20代韓国人女性学部在籍	30代韓国人女性修士課程在籍	30代女性会社員

2.2 方法

1993年10月から1993年12月までの任意の日、曜日、時間帯を選び、実験協力者に「調査目的は日本人の言語行動であり、電話のかけ手の発話は分析対象ではない」と教示し、不安感を取り除いたあとで、以下のタスクにより列車に関する情報収集を依頼した。16名全員が当該列車を利用しておらず予備知識が一定であることを確認した⁽³⁾。

「土曜日の午前10:30にJR徳島駅で友達と待ち合わせをしています。

駅案内に電話をかけ、必要な情報を得てください。」

情報収集は自身がはっきりと分かるまで行うこととし、電話の後で事後報告を受けた。電話中は実験協力者を一人にし、観察者の影響を防いだ。この問い合わせ電話会話を録音し文字化して分析資料とした。(アダプターはSONY TL4もしくはTL11を柵)初回で、個人的感情に全く関わらない事務的問い合わせであるため、被験者である駅員の性差、年齢、親疎関係などは得られた資料へ大きく影響しないと考えられる。

2.3 結果

電話という媒体の選択により外見、動作などの非言語的要素は無視できるため、後述のような項目について、駅員の発話を分析した。駅員の発話

と対応するNNS の日本語能力レベルをFRのグループ名にし、中級FR, 上級FR, 超級FRと分け、NS/NS の会話はNSC とした。

各FRについて文字化した資料から量的な数値を得た。さらにこの数値をもとにNSとNSC について差の検定を行った。これらの二段階の資料をもとに各FRの特徴の分析を試みた。

12名のNNS の中で名乗ったり、外国人であると提示する方略を用いた者が各グループ中1 名ずついた。

2.3.1. 検討項目

(1) 会話の長短：総語数

(2) 発話文の複雑さ：T 単位数およびT 単位中の語数

T 単位 = 最小最終単位⁽⁴⁾

(3) 語種：名詞、代名詞、動詞、助動詞、い形容、な形容詞、連体詞、副詞、接続詞、補助動詞、尊敬語、丁寧語、間投詞、接辞、助詞の項目に分け、それらの下位項目を含め58種をみた。

(4) 語彙密度：異なり語数÷総語数×100

(5) 話す速度：1 分間における総語数

(6) 終助詞の付加：対人関係に関わる「ね／な」、「よ／や」、「わ」、「の」の付加

(7) 指定の助動詞の有無：単語のみの名詞文か、「だ」、「です」が ついた文かどうかをみる。これにより、常体か敬体かの判断ができる。

(8) 相づち頻度：相づちを話者交替が起こらない談話内での聞き手の応答とし、実質的意味を伝達しない語と考える。発話の区切りであるポーズで区切られる句単位(PPU Pause-bounded phrasal unit)⁽⁵⁾ が一回の相づちに対していくつあるかをみた。

(9) 情報提供の重複度：タスク達成に必要な時刻や列車名などの情報を何度提供したかを数えた。

(10) 相互交流的修正数：表 1のような20の項目についてみた。

各項目の結果は表 2を参照。

この結果、表 3に示す通り、統計的にNSC と1%レベルで有意差があった項目が最も多かったのは中級FRであり、次いで上級FRであった。超級FRは日本人同士の会話であるNSC と比べてどの項目にも平均において有意差は

見られなかった。中級FRでは(2)のうちのT単位数(3)(5)(7)(9)(10)にNSCとの有意差がみられた。(8)もかなり高い数値を示しており、さらに検討の価値があると思われる。

上級FRでは(4)(9)(10)にNSCとの有意差がみられた。超級FRは統計的にはNSCと差がなく、FRの範疇に入りにくいことになる。このように、いろいろな項目を検討してみると、各FRの特徴的な点が明らかになった。

2.3.2. フォーリナー・レジスターの特徴

(1) 中級FRは、一文も全体の談話も手短かで、名詞一語文などのような単純な文法構造を持つ。助動詞の省略により、文の簡易化がなされると同時に、敬意を表すような待遇表現が形成されないということにもなる。NNSが行った情報収集のための発話に対して、必要最小限の情報だけを繰り返し重複して与える。話す速度もNSCと比較するとゆっくりで、わかりにくい発話を理解しようとするためか、NNSの発話中は相づちをうたず沈黙する傾向にある。しかし、NNSが長く沈黙することはゆるさず、発話権を取ろうとする。このことは、NSCの会話において、相手が理解するまでの時間として、口をはさまず待つことが観察されたのと対照的であった。NSCでは、最長2.99秒の沈黙時間が観察された。

この沈黙の許容度の異なりは、簡潔さ、分かりやすさ、素早さが求められる「駅への問い合わせ」場面と密接な関係があるかもしれないので、他の場面との比較など検討の余地がある。

(2) 上級FRは、冒頭部でのNNSの文法的誤用やスピーチレベルの選択ミス（すみませんなんですけど、～へ行きたいなんですけど、聞きたいなんですけど、案内所でございますでしょうか）などで、円滑で簡潔な情報のやり取りができず、全体として、冗漫になり、それが語彙密度の低さに表れている。

しかし、上級レベルのNNSは積極的な発話を展開し、発話権を取り返しNSに質問し、自力でミスコミュニケーションを修復することができる。このため上級FRは話す速度も中級FRとは異なり早く、待遇表現にはNSCと差はみとめられない。しかし、情報のやり取りのために行われた相互交流的修正が非常に多く行われていることがわかった。

(3) 超級FRはいずれの項目もその平均においてNSC と有意差は見られなかった。このことは、超級レベルのNNS に対するNSの発話は、いわゆる「日本人同士の会話」と変わらないことになる。

3. おわりに

以上の結果から、実験実施上可能な限り条件統制をした情報収集場面では、話し手の日本語運用能力レベルを反映したFRがあることがわかった。これはFRの下位レベルと考えてもよいだろう。

それぞれのレベルの特徴は、言語形式とパラ言語からなる言語的修正と相互交流的修正から構成される。この構成要素の内容項目の検討と構成比率の違いの検討によりFRの下位レベルがさらに詳しく記述可能になるだろう。

この二つの構成要素の中でも、レベルの異なるFR（中級および上級）の両方に共通してNSC との有意差が見られた「相互交流的修正」と「情報の重複度」について、さらに検証する必要がある。この項目の量と質を検討し分類が可能になったならば、それを指標としてNNS の言語運用能力を測ることが可能になるかも知れないからである。

その可能性は表 4のような資料が示している。中級FRの 4例中の全て、上級FRでは 3例、そしてNSに対して「自分を外国人だと知らせる」方略がとられた超級FRにおいて、相手の発話を完全に予測し、相手と同一テンポで全く同じことを発話する「バックアップ」的発話を得られた。この発話は、会話の進行をしっかりと支えるとともに、瞬時の相互確認によってコミュニケーションを促進させる方略と言える。

しかし、その現れ方の頻度に各FRおよびNSC 間で違いがある。他で差がなかった超級FRのうち、特に相手が外国人であると知らされた場合だけに、このような発話が談話進行の早い時点で一度だけ見られたのは何故だろうか。中級FRの特徴とも考えられるこのようなFRは、超級NNS の高い日本語運用能力によって、談話の進行につれ、その中級的特徴を失っている。相手の言語運用能力レベルの評価が、会話の進行中に変化したことがわかる。変化した原因が、NNS の持つ言語運用能力の反映と考えられるのではないだろうか。

この資料が得られたのは、アイデンティティー表明があると予測したも

の、故意に統制しなかったことによる副産物的結果である。中級NNS にとっては理解可能はインプットとなる意思疎通上有効な方略も、上級NNS、超級NNS にとっては不利に働くかもしれない。このような発話資料は先にも述べたように相互交流的修正の質の検討が重要であり、かつ可能であることを示唆していると思われる。

「FRは発現時と収束時で同じかどうか」またその疑問の解決線で比較検討に値すると思われる「FRには他のレジスター（例えば、NSの子供に対するもの）と本質的にどのような差異があるのかないのか」といったNSの言語態度を考慮した研究が今後の課題と考えられる。

注

- (1) Long, M. H. (1983) "Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input." *Applied Linguistics*, 4. 2. において、相互交流的修正としてstrategy, tactics, strategy and tactics をあげている。
- (2) ACTFL Japanese Guidelines(1987)*Foreign Language Annals*, 20. を参照。超級NNS は二人の評価者の一致した「超級」判定を得ている。中級、上級、超級の定義は牧野(1991)を参照。
- (3) 四国の徳島へ行くには岡山駅を機転とする瀬戸大橋線および高松と徳島を結ぶ高徳線を利用するが、時間帯によって、岡山始発の「渦潮」という特急で徳島まで直行する便と「マリンライナー」という快速と「渦潮」を乗り継いで行く二通りの方法があり、タスクの指定時間では後者になる。初めての場合は日本人でも少し分かりにくい。
- (4) 文の言語的複雑性を表す尺度で文が分割される最小の単位として定義される。(ロングマン応用言語学辞典 P. 389)
- (5) マード, K. 野の定義による。発話に区切りのあるところ、又は会話全体を貫く拍子の抜けたところが客観的に観察できるので、分割の基準となり得るとしている。

参考文献

- (1) 鮎沢孝子 (1987) 「話しことばの特徴」『日本語教育』64号 日本語教育学会 pp. 1-12

- (2) 大河原眞美 (1989) 「日本語と英語におけるフォーリナー・レジスターの比較研究」『講座日本語教育』第24分冊早稲田大学日本語研究教育センター pp. 88-101
- (3) 尾崎明人 (1981) 「上級日本語学習者の伝達能力について」『日本語教育』45号 日本語教育学会 pp. 41-52
- (4) ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析』くろしお出版
- (5) 志村明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68号 日本語教育学会 pp. 204-215
- (6) スクータリデス、アリーナ (1981) 「日本語におけるフォーリナー・トーク」『日本語教育』45号 日本語教育学会 pp. 53-62
- (7) ————— (1988) 「日本人が外国人と話すとき」『国文学—鑑賞と解釈』第53巻 1号 SHIBUNDO pp. 118-125
- (8) ネウストプニー、J. V. (1989) 「日本人のコミュニケーション行動と日本語教育」『日本語教育』67号 日本語教育学会 pp. 11-24
- (9) 牧野成一 (1991) 「北米における日本語教育概観」『講座日本語と日本語教育』第16巻 明治書院
- (10) メイナード、K. 泉子 (1987) 「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』Vol. 16 大修館書店 pp. 88-92
- (11) ————— (1993) 『会話分析』くろしお出版
- (12) ロング、ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォーリナー・トークを中心に—」『日本語学』Vol. 11 明治書院 pp. 24-32
- (13) *ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual* (1989) Eds. Byrnes, Heidi., Thompson, Irene. Buck, Kathryn, NY:ACTFL
- (14) Arthur, Bradford., Weiner, Richard., Culver, Michael., Lee, Young., and Thomas, Dorina. (1980) "The Register of Impersonal Discourse to Foreigner Verbal Adjustments to Foreign Accent." *Discourse Analysis in Second Language Research*. Ed. Diane Larsen-Freeman. Rowley:Newbery House

- Publishers, Inc. pp.111-124.
- (15) Ferguson, Charles A. (1971) "Absence of Copula and the Notion of Simplicity: A Study of Normal Speech, Baby Talk, Foreigner Talk and Pidgins." *Pidginization and creolization of Languages*. Ed. Dell Hymes. NY: Cambridge University Press. pp.141-150.
- (16) Harrington, Michael. (1986) "The T-Unit As A Measure of JSL Oral Proficiency." *Descriptive and Applied Linguistics*. Vol. X IX Tokyo: International Christian University pp.49-56.
- (17) Long, Michael H. (1983) "Native Speaker/Non-Native Speaker Conversation and the Negotiation of Comprehensible Input." *Applied Linguistics*. Vol.4, No.2. pp.126-141.
- (18) Okawara-Hiraike, Mami. (1990) "Japanese Foreigner Register in the Use of Vocabulary." *On Japanese and How to Teach It*. Eds. Kamata, Osamu and Jacobsen, Wesley M. Tokyo: The Japan Times. pp.211-223.
- (19) Onaha, Hiroko, (1987) "Foreigner Talk in Japanese: A Comparison of Ellipsis of Particles and Noun Phrases Between Foreigner Talk and Speech to Native Speakers." *JACET Bulletin*. No.18. pp.89-107.

資料

〈表1 相互交流的修正〉

- (1) TRP ⁽¹⁾ で話題の選択権を取る。
- (2) TRP で話題の選択権を譲る。
- (3) 急な話題転換を受け入れる。
- (4) 媒介語的表現をとる。
- (5) 説明を要求する。
- (6) 分かってもらえたか確認する。
- (7) 相手の発話を続けて完成させる。
- (8) 自分の発話を止めて（文節で止め、省略的にする）、相手に完成させる。
- (9) 相手の発話と同じことを同一テンポで言う。
- (10) 相手の発話を訂正する。
- (11) 相手の発話を訂正しない。
- (12) キーワードを強く言う。
- (13) キーワードを音節毎にはっきり区切って言う。
- (14) キーワードの前にポーズを置く。
- (15) 自分の発話を繰り返す。
- (16) 相手の発話を繰り返す。
- (17) 自分の発話をまとめて言い直す。
- (18) 相手の発話をまとめて言い直す。
- (19) 相手の沈黙を許容する。
- (20) 相手の沈黙を許容しない。

注(1) TRP: Transitional-relevance place

話者が交替を促すような合図を送る箇所、話者交替が可能な箇所でもある。

〈表2 被験者(駅員)の発話〉

	①発音数	平均	②T単語数	平均	②'T単語中音数	平均	③語種	平均	③音節数	平均	④語速	平均
中-I★	96	95.8 (22.27)	8	6.3 (1.08)	58	40.8 (10.98)	17	15.3 (2.04)	17.7	15.9 (2.68)	37	53.0 (14.8)
中-II	127		6		42		15		11.8		52	
中-III	64		6		29		12		18.8		77	
中-IV	96		5		34		17		15.3		46	
上-V	292	242.5 (92.65)	26	18.0 (8.25)	162	137.0 (56.40)	26	23.3 (3.11)	8.9	9.7 (0.53)	88	87.3 (24.6)
上-VI	234		19		166		24		10.2		77	
上-VI★	178		9		40		18		10.1		33	
上-VII	42		5		180		25		9.4		97	
高-IX★	375	158.8 (126.31)	25	15.0 (7.44)	185	96.8 (54.11)	32	20.5 (7.22)	8.5	20.2 (5.40)	39	71.6 (14.90)
高-X	70		6		46		16		22.8		76	
高-XI	118		10		60		21		17.7		64	
高-XII	72		19		96		13		20.3		75	
NS-XIII	107	96.8 (25.61)	9	12.0 (4.09)	71	96.0 (40.98)	22	14.0 (2.23)	20.5	20.5 (3.48)	76	75.5 (8.16)
NS-XIV	63		9		56		16		25.0		63	
NS-XV	132		19		163		20		15.2		86	
NS-XVI	85		13		94		18		21.2		76	

注 1. () 内は標準偏差 2. ★印は外国人であることを分かせた方略に対するFRを表す。3. NSはコントロール・グループである日本人話者。

	①教員員の付加%	平均	②出勤率電受%	平均	③格づら数	平均	④重複増程	平均	⑤相互交換の修正数	平均
中-I ★	3	4.8 (3.96)	66	81.9 (9.87)	10.6	30.6 (2.90)	6	11.3 (5.93)	10	15.0 (7.17)
中-II	11		81.5		5		19		21	
中-III	1		88.9		4.5		5		6	
中-IV	2		91.3		10.5		15		23	
上-V	18	13.5 (6.80)	63.4	53.0 (22.49)	0	10.0 (1.76)	10	11.8 (4.81)	15	16.25 (5.80)
上-VI	9		26.2		2.6		9		13	
上-VI ★	5		84.2		5		20		26	
上-VII	22		38		2.4		8		11	
経-R ★	7	7.7 (1.63)	61.5	56.7 (11.13)	3.1	13.5 (0.90)	13	6.3 (4.81)	12	7.25 (4.49)
経-X	4		37.5		4.8		0		1	
経-XI	3		64.2		3.3		8		11	
経-XII	3		63.6		2.3		4		5	
NS-XIII	7	6.3 (1.92)	40	46.7 (10.98)	4.2	14.5 (0.76)	2	1.8 (0.86)	3	2.75 (0.43)
NS-XIV	4		64.5		4		2		3	
NS-XV	9		46.6		4		2		3	
NS-XVI	5		35.7		2.3		0		2	

〈表3 中級FR・上級FR・超級FRとNSCの比較〉

	検討項目	中級FR	上級FR	超級FR
①	総語数	t=0.05	t=1.61	t=0.53
②	T単位数	t=2.35*	t=0.42	t=0.51
	T単位中語数	t=2.25	t=1.02	t=0.02
③	語種	t=2.14*	t=1.92	t=3.57
④	語彙密度	t=1.79	t=5.50*	t=0.84
⑤	話す速度	t=2.27*	t=0.10	t=1.19
⑥	終助詞の付加	t=0.78	t=2.03	t=1.37
⑦	助動詞省略度	t=4.12*	t=0.43	t=1.10
⑧	相づち数	t=2.33*	t=0.99	t=0.33
⑨	重複情報	t=2.81*	t=3.62*	t=1.68
⑩	相互交流的修正数	t=2.95*	t=4.01*	t=1.72

*Significant at $p < .01$.

〈表4 バックアップ的発話の現れ方〉

部分が観察された箇所。数字は談話の流れを示し、1 から始まっているが、ここでは資料の一部しかだしていない。NSC では全く見られなかった。★印はNNS が「自分は外国人だ」といったかもしくは名乗ったFRを指す。

★中級FR [会話Ⅰ]

- 19A 徳島駅で、十時半、
20B そう。
21A の、待ち合わせ。
22B そう。
23A はい。
24A もちろん、午前よね↗
25B はい、ごぜん、そう。
26A え—————、おか、十時二十八分に着くんですよ、徳島に。
27B じゅう、じゅうじ／／にじゅうはち、ふん。
28A にじゅうはち、ふん。
29B uh huh↗

中級FR [会話Ⅱ]

- 8C 朝の十時半。
9D はい、そうです。
10C 十時半、(ああ、これちょうどええなー。)
11C えー、岡山をね↗
12D はい。
13C 七時四十八分。
14D だから、しちじ↗／／よんじゅうはちふん。
15C よんじゅうはちふん。
16D はい。

中級FR [会話Ⅲ]

- 19E それが高松行き。

- 20F はい。
- 21E 高松に、えー、着くのが、八時五十一分。
- 22F はちじ／／ごじゅういっぷん。
- 23E ごじゅういっぷんに／／高松について、
- 24F はい。

中級FR [会話Ⅳ]

- 34G マリンライナー五号。
- 35H はい、はい。／／
- 36G 七時十二分発で一、
- 37H はい。
- 38G 高松駅到着、八時十二分。
- 39H はち、じ、じゅうに、ふん。
- 40G 高松駅発、
- 41H たかー／／まつ、えき。
- 42G まつ、えき、／／発、は、つ、
- 43H はい。

上級FR [会話Ⅵ]

- 47L あのー、はい、とっきゅうですね。
- 48K はい、はい。
- 49L とっきゅう、
- 50K うずしお一号と三号でね／／ー。
- 51L はい、ん、なんごうですか／
- 52K 一号と三号で／／す。
- 53L はい、いちごうとー／／さんごう、で、
- 54K さんごう。
- 55K はい。

★上級FR [会話Ⅶ]

- 126M えー、もういちど、かくにんしても、よろしいでしょうか／
- 127N はい、
- 128M あのー、あ、おかやま、あの、あさ、なな、え、しちじー

- //よんじゅうはっぶん、ですね↗
 129N よんじゅうはっぶん。
 130M にのって、えー、こー、//たかまつ、たかまつにのりかえ、
 131N たかまつ、
 132N 高松、八時五十一分でね↗
 133M はい。

上級FR [会話Ⅷ]

- 650 それはね、
 660 マリンライナー七号、いうのに乗ってですねー、岡山を。
 67P マリン、ライナ↗//
 680 七号。
 69P マリンライナ、//ななごう。
 700 ななごう。
 710 七時四十八分ですわ。

★超級FR [会話Ⅸ]

- 19Q はい、では、岡山駅を七時四十八分。
 20R しちじ//、よんじゅうはちふん。
 21Q よんじゅうはちふん。
 22R (し//ゅっぱつですか↗)
 23Q マリンライナー七号。